

『遍昭集』伝本系統についての考察

— 冷泉家時雨亭文庫蔵の二本を中心に —

片 桐 ま い

一、はじめに — 『遍昭集』諸本の概要 —

古来、僧正遍昭が和歌の道において一定の地位を占めていたことは、『古今和歌集』の序において「ちかき世にその名きこえたる人」¹⁾として言及され、そのために後世六歌仙と仰がれたこと、藤原公任によって『三十六人撰』の一人に撰ばれたこと、藤原定家の『小倉百人一首』に歌が採られていることなどの事実から容易に想像される²⁾。しかしこれらはすべて、遍昭の没後に与えられた栄誉である。遍昭の家集『遍昭集』もまた後人による他撰であることから、その編纂は遍昭自身の意図ではなく没後における彼の和歌、および歌人遍昭その人の享受のあり方を伝えた資料であると言える。

『遍昭集』の現存伝本はそのほとんどが三十六人集のひとつとして伝わっており、第一首目から第三四首目までの歌順は諸本一致している。そのためこの部分が『遍昭集』における基本部分であると

考えられるとともに、『遍昭集』諸本はただ一系統であるとも言うこともできる。しかしながら収録和歌数の違いによって、次の三類に分けるのが通説である³⁾。

第一類本（西本願寺本系統）

西本願寺本・蓬左文庫蔵本・書陵部蔵（五〇六・八）本・神宮文庫蔵（二二〇四）中院通勝本・陽明文庫蔵（二二二・二）本など。

第二類本（歌仙家集系統）

正保版本・陽明文庫蔵（一〇六八）本・内閣文庫蔵（二〇一・四三三）本・内閣文庫蔵（二〇一・四三四）本・静嘉堂文庫本蔵（一〇五・一一）本・京都大学蔵本・広島大学蔵本など。

第三類本（冷泉家本花山僧正集系統）

冷泉家時雨亭文庫蔵花山僧正集・書陵部蔵（五一〇・一一）本
第一類本は西本願寺本三十六人集の『遍昭集』に代表される系統であり、西本願寺本系統と呼ばれる。この系統は先に述べた基本部

分に一致する三四首の歌を持つが、末尾に第二類本と同じ二首が増補され、三六首となったものもある。

第二類本は正保版本歌仙家集の系統で、江戸時代以降広く流布した本文を持つ。基本部分の歌順は西本願寺本とほぼ一致しているが、西本願寺本に言う二七番歌と、それに続く二八番歌の詞書とを脱している。正保版本のように他本によって二七番歌を補っているものもあるが、二八番歌の詞書を持つ本はない^④。そして、以上のような基本部分のあとに、「我やとは道みえぬ^{もなき}まであれにけりつれなき人を待とせしまに^⑤」、「世をいとひこのもとことに立よりてうつふしそめのあさのけさ也^{きぬ}」の二首が増補されている点が、第二類本の大きな特徴である。

第三類本は冷泉家時雨亭文庫蔵花山僧正集の系統である。第三類に分類される伝本はもともと宮内庁書陵部蔵(五一〇・二二)本(御所本と呼ばれる)が知られるのみであったが、後に発見された冷泉家時雨亭文庫蔵本(本稿では外題により『花山僧正集』と呼ぶ)が御所本の親本であるということが、片桐洋一氏によって明らかにされた^⑥。この系統もまた基本部分は第一類本とほとんど一致しているが、二番歌・三二番歌の詞書を脱している。そして三五首目に第二類本と同じ「我やとは」の歌を載せ、さらに一九首を増補して都合五四首の歌を持っている^⑦。

『遍昭集』諸本は以上のように系統づけられてきたのであるが、

近年、片桐洋一氏によって冷泉家時雨亭文庫蔵唐草裝飾本『遍昭集』(以下「唐草裝飾本」)の全貌が明らかにされた^⑧。平安時代末期の書写と見られるこの本は、『遍昭集』で基本部分とされてきた三四首のうち、最後の「はちす葉のこりにしまぬ心もてなにかはつゆをたまとあさむく^⑨」の歌を載せず、全三三首となっている。片桐氏は『遍昭集』諸本のうちで最も小さい形態をとるこの本について、「遍昭集が末尾に次々と歌を加えてゆくことによって成長増益して行ったと見るならば、最も歌数の少ないこの唐草裝飾本は遍昭集の最も古い形を伝えているという見方も成り立つ^⑩」と考えられた。このような片桐氏の説を踏まえ、藤本孝一氏は『遍昭集』の系統を歌数の違いによって新たに、①『遍昭集』^{唐草裝飾本}(三十三首)、②西本願寺本系統(三十四首)、③正保版歌仙家集本系(三十六首)、④『花山僧正集』系統(五十四首)の四類に整理された^⑪。なお二〇〇七年に出版された『流布本三十六人集 校本・研究・索引』^⑫の解題においても四類に分けられているが、ここでは西本願寺本系統を第一類、唐草裝飾本系統を第二類、歌仙家集本系統を第三類、冷泉家本『花山僧正集』系統を第四類とし、唐草裝飾本については「第一類本の三四番を欠いている」という説明がなされている。

以上のように『遍昭集』は基本的に、その歌数によって伝本の系統が定められてきた。本稿は『遍昭集』の伝本系統を、その歌数ではなく本文に注目することによって整理することを目的とする。ま

た、基本部分に対して歌数の少ない唐草裝飾本、および歌数の多い『花山僧正集』の発見によって、『遍昭集』研究に何が加わるべきかについて考察したい。

二、唐草裝飾本と他伝本の本文比較¹³⁾

まず唐草裝飾本『遍昭集』を翻刻し、それと他の主要伝本である西本願寺本、正保版本、『花山僧正集』の三三首目までについて本文の比較をおこなった。そして唐草裝飾本独自の本文が見られるかどうかを確認し、以下にその特徴的なものを挙げた。傍線は稿者が私に付したもので、他本と異同がある箇所を表わす。なお通説の便を考え、本文に適宜句読点を付した。

1、二番歌「あさまたき」と「あさみどり」

西寺のやなきを

あさまたきといよりかけて白露をたまにもぬける春のやなきか

唐草裝飾本『遍昭集』二番歌の初句は「あさまたき」であるが、これは他本では「あさみどり」となっている。前掲の『流布本三十六人集 校本・研究・索引』においても、初句を「あさまたき」とする本はない。また『遍昭集』二番歌を載せる『古今和歌集』諸本においても初句を「あさまたき」とする伝本はない¹⁴⁾。この歌は

柳についての詠であるので、柳の枝を連想させる「あさみどり」の方が適切であるように思われるが、しかし柳に置いた露の方に目を向ければ、露の置く時刻である「あさまたき」も決して不自然ではない。事実この歌は『袋草紙』下巻「詠異事哥」に、

露

春露 朝またき糸よりかけて白露を玉にもぬくか春の青柳

のように、初句を「朝またき」として収録されている¹⁵⁾。いずれにせよ、ここは唐草裝飾本の独自性が目立つ本文である。

2、二六番歌「かしかまし」と「ことくし」

秋の野になまめきたてるをみなへしあなかしかまし花も一時

唐草裝飾本『遍昭集』二六番歌の第四句は「あなかしかまし」であるが、ここは他の伝本では「あなことくし」となっている。これは女郎花の咲いている情景を、女郎花を女性に例えつつ、「花も一時」のことであるのに、と苦々しく思っている歌である。「かしかまし」が音声についての形容であることを考えれば、この歌が花を対象としている点から「ことくし」の方が適当であるかもしれない。これについて金子元臣氏は、「かしかまし」を女郎花に言ったのでは筋が通らないとし、「女郎花はなまめいてゐるだけで、喧しいのはそれを見はやす人達」との解釈を行っている¹⁶⁾。また現在の『古今集』注

釈書では、女郎花が競い合うように咲き乱れる様子から美しさを競う人間の女性たちを連想したとし、彼女らの喧噪を表すと解釈しているようである¹⁷⁾。つまりどちらの本文であっても解釈の仕様はあると言える。この歌は『古今集』諸伝本においても第四句を「かしかまし」とする形で入集しているものが多いが、しかし中には「ことくし」の本文を持つものもあり、前田家本（保元二年清輔本）などは本文を「かしかまし」としつつも、勘物に「普通はあなごとことし」と書いている¹⁸⁾。時代が下ると『遍昭集』諸伝本でも挿れていることが『流布本三十六人集 校本・研究・索引』によって分かる。

3、詞書「あるく」と「ありく」

唐草装飾本『遍昭集』本文の大きな特徴として、詞書に動詞「あるく」が使われている点が挙げられる。「あるく」の用例は以下の三箇所である。

- 一、なにくれといひまかりあるきしほとに、（中略、一一番歌詞書）
 - 二、なと思つ、けてまかりあるきしほとに、（中略、一六番歌詞書）
 - 三、かくて、いともなくあるき侍し、（中略、一七番歌詞書）
- これらの箇所は、他本ではすべて動詞「ありく」が用いられている。唐草装飾本『遍昭集』において「あるく」が使用されている理由は分からないが、特徴的な異同ではある¹⁹⁾。

以上の1〜3のように、唐草装飾本には独特の本文を持つ箇所が

認められる。しかしながらその数は必ずしも多くはなく、また唐草装飾本が他の伝本と著しく異なる記述をしている点は特に見つからなかった。例示したような異同は和歌の解釈に多少関わってはくもの、どれも単語一つ程度の細かな違いである。唐草装飾本だけが他の主要伝本のいずれとも異なる表現をしているという箇所は三〇箇所を満たさず、そのほとんどは誤脱や誤写かと思われる些細なものである。

それよりも目を引くのは、唐草装飾本と『花山僧正集』との本文の近似である。次章ではそのことについて検討する。

三、唐草装飾本と『花山僧正集』

唐草装飾本『遍昭集』の本文をよく見ていくと、それが『花山僧正集』の本文と近くなっていることが分かってくる。なおかつそれらの箇所では、西本願寺本の本文が正保版本と一致している場合が多いのである。以下には唐草装飾本と『花山僧正集』とが一致し、かつ西本願寺本・正保版本の本文と対立している箇所を掲げ、対立箇所傍線を附した。まず和歌について例示していくが、たとえば三〇番歌第四句の例がある。

「唐草装飾本」三〇	「西本願寺本」三〇
わひ人のわきてたちよるこの本はた のむ影にも、みちちりけり	わひ、とのわきてたちよるこのも はたのむかけなくもみち、りけり

この歌の第四句は唐草裝飾本・『花山僧正集』においては「頼むかげにも紅葉散りけり（傍点は執筆者、以下同じ）」となっており、一方西本願寺本・正保版本の本文は「頼むかげなく、」である。西本願寺本・正保版本の本文の方が、陰を持つはずと頼りにしていた木の葉がすでに散ってしまっていることを適切に表現していると考えられる。ここでは唐草裝飾本・『花山僧正集』の「にも」と、西本願寺本・正保版本の「なく」とが対立している。

次も和歌における例である。

「唐草裝飾本」三二 ちりぬれはにはのあくたになる花を おもひしらすもまとふてふかな	「西本願寺本」三二 ちりぬれはのちはあくたになる花を おもひしらすもまとふてふかな
---	---

唐草裝飾本・『花山僧正集』における三二番歌の第二句は「には、のあくたに」である。唐草裝飾本が見つかるまで、『花山僧正集』にある「にはの」はまったく独自の本文で、他に共通する本はなかった。なお『花山僧正集』ではこの「にはの」の右傍に「のちは」とあり、それに合点が付されている。この「のちは」の方がよく見られる本文であり、西本願寺本・正保版本の第二句も「のちはあくたに」である。この歌を載せる『古今集』の諸本も「のちは」とするものばかりで、「にはの」の本文は見られない²⁰。また藤原公任が『新撰髓脳』においてこの歌に言及しているが、ここではこの歌の、「ちりぬれはのちは」と「は」の音が続く点を、「耳にとゞま」る、す

なわち耳障りである例として取り上げている。つまり公任の時代にも「のちは」の本文の方が流布していたことが分かるのである。現在「にはの」の本文が見られるのは、唐草裝飾本と『花山僧正集』だけである。

このように唐草裝飾本の本文には『花山僧正集』の本文と一致している箇所が見られるのであるが、その傾向は歌句よりもむしろ詞書において顕著である。次の例は一七番歌の詞書で、『遍昭集』の中でも詞書が長く物語的になっている部分である。

唐草裝飾本 いみしうなくこゑきゆるに、心き も、うせていみしくかなしくて、な そやはしりやいてなましとおもへ と、いみしくかへさひ思て、夜もす からなきける所は、みのなどもくれ なぬになむしみたりける。	西本願寺本 いみしうなく。いみしうかなしく て、なそやはしりやいてなましと ちたひおもへと、いみしうかへさひ て、夜もすからなきあかしたるとこ ろは、みのなどもくれなるになむし みたりける。
---	---

右は仁明天皇の崩御を受け、家族にも告げずに突然出家した遍昭が、彼の安否を知るために仏の力にすがって寺に駆け込んだ妻の声を偶然聞いた場面で、その時の遍昭の思いを記している箇所である。遍昭のかなしさを表現するのに唐草裝飾本・『花山僧正集』では「心肝も失せて」という描写をしているが、それは西本願寺本・正保版本にはない表現である。また西本願寺本・正保版本では妻のもとに駆け寄りたいと「千度」思ったというが、その表現は唐草裝飾本・『花山僧正集』にはない。

妻との邂逅を経たのち、依然として世の中の人々から隠れて修行をしていた遍昭は、長谷寺において出家前に親交のあった小野小町と出会う。

唐草裝飾本	西本願寺本
あやしくあてはかにたうときこゑにて陀羅尼よむ、たれならんと、	かたはらによりて結よむを、たれならむとて、

右は、聞えてくる読経の声に小町が興味を覚える場面である。唐草裝飾本・『花山僧正集』では「あやしくあてはかにたうときこゑにて陀羅尼」を読むのが聞えて来るが、西本願寺本・正保版本では「かたはら」で「経」を読んでいるのが聞こえる。これはかなり印象的な異同である。ここで小町は、この僧がかつての良岑宗貞ではないかと思い、歌を詠みかけて確かめる。それに対する返歌によって宗貞であると確信した小町は遍昭に近づこうとするが、遍昭は先に姿を隠してしまう。次がその場面である。

唐草裝飾本	西本願寺本
ものもいはむと思て、たつねいきたりけれと、ふとかくれにけり	ものもいはむとおもひて、たつねいきたりけれと、ふとうせにけり

遍昭が姿を隠す動作について、西本願寺本・正保版本では「うす」が、唐草裝飾本・『花山僧正集』では「かくる」が用いられている。以上のように『遍昭集』には、唐草裝飾本・『花山僧正集』と西本願寺本・正保版本とで本文が対立しているケースが多く見られ

るのである。試みに唐草裝飾本の三三首目までの本文について、他本との異同の数を数えてみたところ、西本願寺本との異同は一五八箇所、正保版本とは一八五箇所であったが、『花山僧正集』とは一〇七箇所であり、『花山僧正集』との異同が最も少ないことが確認できる²²。また本文が唐草裝飾本・『花山僧正集』とで共通し、それが西本願寺本・正保版本の本文と対立している例は五五箇所が確認できたが、この五五箇所という数値は他の場合のおよそ九倍の数であった²³。ここからも、唐草裝飾本が『花山僧正集』により近い本文を持つことが明らかなのである。

四、冷泉家時雨亭文庫蔵『花山僧正集』の系統

これまで唐草裝飾本『遍昭集』と主要な『遍昭集』伝本の本文を比較し、唐草裝飾本の本文が『花山僧正集』と近似していることを述べた。それではいったい、『花山僧正集』とはどのような本なのであろうか。

『花山僧正集』と同系統の伝本は御所本のみであり、御所本は『花山僧正集』の忠実な転写本である。これら二本には、末尾に以下の識語がある。

此二牧者宇喜多宰相依

所望進之也

文禄三年七月八日羽林郎藤（花押）

『花山僧正集』が発見されるまで、つまり御所本が『遍昭集』諸伝本中唯一の異本であった当時、右の識語にある「此二牧」という語は議論的であった。阿部俊子氏は、「此二牧」は「此二枚」であり、それは『花山僧正集』における二〇首の増補部分に該当するかとされたが、それに対し橋本不美男氏は、「牧」に「まき」という訓の共通から「巻」を当て、親本は卷子本仕立てで、基本部分と増補部分とが別仕立ての二軸であったという説を提示された。小林茂美氏はこの橋本説を支持されていたが、阿部氏は橋本説について、『遍昭集』程度の分量の歌集を二巻にまとめている例がないので不審とされた。この間に小松茂美氏は古筆学研究の立場からこの識語を当時の「古筆愛好熱」の現れと捉え、阿部説と同じく「二枚」と解されたが、しかしその「二枚」は進上されたのであって御所本の本文中には存在しないものと想定された。

以上の議論に決着を付けたのが、『花山僧正集』の発見であった。先述の通り片桐洋一氏によって御所本の親本であると明らかにされた『花山僧正集』は、一八丁オモテから一九丁ウラまでの末尾〈二枚〉（四七番歌詞書から最後まで）の八首が、それ以前の筆跡とは異なる定家様で書かれていたのである。例の識語もまた定家様で書かれており、もともと『花山僧正集』の末尾に存していた〈二枚〉こそが、まさに宇喜多秀家の所望によって古筆切とされた「二牧」であり、それを切り取って進呈するにおよび冷泉為満が「二牧」を補写

した、というのがこの識語の真相である。

では、この補写部分の親はいったいどのようなものだったのだろうか。これについて徳川義宣氏はかつて、御所本『遍昭集』の末尾と一致する本文を徳川家康が書写した手習があることを紹介され、「此二牧」がのちに徳川家康の所有となったらしいことが判明した。徳川氏は、「遍昭集の末尾から切取られた二丁は、宇喜多秀家に秘藏され」、「表裏を分けて軸装され」鑑賞されたが、「秀家の手中にあること僅かに満六年餘、關ヶ原戦役後の所領改易・家財没取によって、早くも秀家の手をはなれ」、家康の手に渡ったものと考えておられる。また徳川氏はこの「二牧」そのものと思われる伝定家筆の断簡が、過去に東京美術倶楽部で行われた展覧会目録に掲載されていることをも紹介された。この断簡が定家の真筆だとするならば、為満はこれを補写したと見て間違いないだろう。

家康の手習の紹介により、為満が宇喜多秀家に進呈した「二牧」（為満による補写部分の親）が定家によって書かれていたらしいと判明したのを受け、片桐洋一氏は以下のように述べている。

定家は平安時代後期書写の『花山僧正集（僧正遍昭集）』一帖を入手、それに入墨して校訂した上で、最後の二丁にその平安書写本にない歌八首を、他本によって自筆で補ったのである。古い写本の末尾に、その本にない歌を他本によって補うことはよくあることで、定家も『一条撰政御集』の末尾に

二首を補っているのであるが、この集の場合も八首を末尾に補ったのであろう。

つまり『花山僧正集』は四六首目までが本体であり、「此二牧」に当たると四七番詞書から最後まででの八首は定家による増補であると結論付けられたのである。

五、『花山僧正集』と歌仙家集本系統

以上のように『遍昭集』には歌数四六首の伝本が存在したこと
が想定されるのであるが、藤本孝一氏は、この、『花山僧正集』の
四六首目までを書写した本（定家筆）が、歌仙家集本系統の祖本に
該当するのではないかと推測された³³。その理由として藤本氏が挙げ
られた歌仙家集本系統の特徴を以下にまとめる。

①『花山僧正集』には定家による校訂の筆が見られるが、これ
が歌仙家集本系統『遍昭集』の本文に多く反映されている。

②歌仙家集本系統に増補された三五首目は『花山僧正集』の
三五首目と同じである。また三六首目は『花山僧正集』の平
安写本部分最後の四六首目にあたる。つまり歌仙家集本系統
の本の本文には『花山僧正集』の三六首目から四六首目詞書
までがなく、この欠落は一面五首と想定すると一丁分の欠落
になる。定家本を親本にして書写する過程で二丁分を重ねて
めくったために、見開き一丁分書写しなかった事象であると

推測される。

③定家の増補部分と考えられる四十七首目以降は歌仙家集本系
統にはない。

これらを根拠に藤本氏は、歌仙家集本系統の祖を『花山僧正集』
の四六首目までを書写した定家本であると推断されたが、ここで
の説についての私見を述べたいと思う。まず藤本氏の説①の定家
による書入についてである。片桐洋一氏は定家によって『花山僧正集』
に加えられた校訂の筆として、次の七箇所を挙げて解説された³⁴。

『花山僧正集』における定家の書入
(片桐洋一氏による)

所在	書入	内容
一番歌第四句	ぬ「す」め春山風	右傍に補入。
四番歌第二句	ふるのや「まへ」の…	本行の「しろ」を見消 にし、右傍に書く。
一九番歌詞書	かたらひし「中」なり…	重書。下の文字不明。
二四番歌初句	「名にめて、」をれる…	本行の初句「いろを見 て」の右傍に書く。
三一一番歌第二句	「のちは」あくたに…	本行の第二句「には」の 右傍に書く。
三二一番歌	「花の中めにあくやとて…	合点「削除記号」を付す。
三九番歌第五句	ちかく「みゆらん」	本行の「なるらん」に重書。

・定家による書入を「」で括り、下段に説明を附した。
・「」は合点を表す。

これらの書入箇所について確認するに、歌仙家集本系統の本文
が、『花山僧正集』における定家の校訂にのみ做ったと断言するこ
とはできないと考える。表に示した書入のうち、歌仙家集本に存す

る三二番歌までについて見ていくと、まず一番歌・四番歌・一九番歌詞書において校訂された本文は、『遍昭集』の他の伝本の本文とも一致しているため、歌仙家集本系統が確実に『花山僧正集』を参照したものと断定できない。

二四番歌初句では『花山僧正集』の「いろを見て」の右に「名にめて、」と傍書し、そちらに合点を付していることから、定家は「名にめて、」の本文を正しいとしたようである。なるほど歌仙本系統の本文も「名にめて、」となっているが、しかし『遍昭集』伝本中では唐草裝飾本の本文も「なにめて、」であるし、またこの歌を入集している『古今集』の伝本ではほとんどが初句を「名にめて、」としている。歌仙家集本系統の本は『古今集』に倣ったとも考えられるのである。

三二番歌の「のちは」の本文は西本願寺本と正保版本とで共通しているものであり、『古今集』の諸伝本においても「のちは」の本文ばかりが見られるということは先述したとおりである。歌仙本系統はそれらの本に倣ったことも考えられ、確実に『花山僧正集』に付された合点によって「のちは」の本文を採用したとは断定できない。

三三番歌は、『古今集』伝本においては僧正聖宝という、遍昭とは別人の詠歌とされているものであるが、定家は『花山僧正集』のこの歌に抹消符を付し、これを削除すべしと判断したらしい。しかしながらこの歌は歌仙家集本系統の『遍昭集』にも削除されるこ

となく収められている。

以上確認した通り、定家による書入箇所からは、歌仙家集本系統の祖が『花山僧正集』であると言いつけることはできないのである。

続いて藤本氏の説②の、一丁分書き落としたという推定についてである。この想定のためには三六首目から四五首目までの十首および四六首目の詞書が「見開き一丁分」の範囲に収まる必要がある。現存『花山僧正集』において三六首目から四六首目の詞書までは四七行五二〇字であり、およそ三丁半にわたってちらし書きのように書かれている。この範囲にある和歌と詞書とをそれぞれすべて一行に整えて書いたとすれば、これは合計一九行となり、一面十行で書いた場合には見開き一丁にちょうど収まる分量ではある。しかしながら、平安時代頃の私家集において和歌を一行書きにする本は珍しいのではないだろうか。このころの私家集は枳形本など小型の本が多く、たとえば『遍昭集』でも西本願寺本、『花山僧正集』、唐草裝飾本はすべて和歌を二行書きにしている。また藤本氏の説では親本は定家筆であるが、現在定家自筆とされる写本では通常、勅撰集のほかは和歌が二行書にされている。これらのことから、この範囲にある十首が見開き一丁に書かれていたと考えるのは無理があると思うのである。

稿者は、『花山僧正集』を歌仙家集本系統の祖と見ることはできないと考えている。その理由として第一に挙げたいのは、『花山僧正集』

と正保版本との本文に隔たりがあることである。藤本氏の説に従えば、『花山僧正集』の四六首目までを書写した定家本を祖とする歌仙家集本系の本文は、もちろん『花山僧正集』の本文と近くなっているはずであろう。しかし先に検証した通り『花山僧正集』と歌仙家集本の本文はむしろ対立していると言える。本文を確認する限り、『花山僧正集』系統と歌仙家集本系統との間に密接な交渉があったとは考えにくい。むしろ歌仙家集本の本文は、早い段階で『花山僧正集』の伝える本文の系統と離れたことが考えられるのである。

それでは、『花山僧正集』と歌仙家集本系統のどちらも三五首目と同じく「我やとは」の歌を増補しているのはなぜであろうか。藤本氏はこの一首の存在によって、『花山僧正集』と歌仙家集本系統とを引き寄せたかに見えるのだが、この「我やとは」の歌は、『古今集』巻第十五・恋歌五に入集しているものである。そして、『古今集』に入集している遍昭歌一七首のうち、この歌だけが『遍昭集』の基本部分に入られていないのである。つまりこの歌は、『古今集』によって人目に触れる歌でありながら、『遍昭集』編纂の際には忘れられてしまったような状況にあったと言える。『花山僧正集』および歌仙家集本系統では、『古今集』に見られるものの『遍昭集』基本部分には入れられていないこの歌について不審に思い、それぞれ独自に『古今集』から末尾に増補したのではないだろうか。『古今集』に載る有名歌であり、またこの一首だけであるので、偶然の

一致ということも考えられるだろう。

また、藤本氏自身も先述の論文の中で指摘されている通り、『花山僧正集』の四六番歌と歌仙家集本の三六番歌には異同がある。

・『花山僧正集』 46

よをいとひこの本ことにたちよりてめのいとまなきあさのけのきぬ

・正保版本 36

世をいとひこの本ことに立よりてうつつふしそめのあさのけさなり

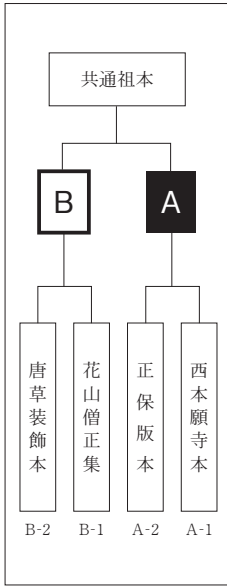
藤本氏はこの理由を、歌数四六首の平安写本と歌仙家集本の親本との間に「定家自筆の一本が介在し」たためであると説明しているが、はたしてそれでこの異同が説明できるだろうか。『花山僧正集』のこの歌には、定家による校訂の筆はまったく入っていないのである。この下の句の異同は、やはり両『遍昭集』がそれぞれ異なる資料に依ったことを示すものではないだろうか。

六、おわりに

本稿では、『遍昭集』主要伝本の本文比較を通して、新資料である唐草装飾本が『花山僧正集』系統に近い本文を持つことを明らかにした。ここから『花山僧正集』は、唐草装飾本やそれに近い本文をもつ『遍昭集』と接したものであり、その末尾に和歌を増補した系統の本であることが考えられる。片桐洋一氏は「西本願寺本に近いある本が、(中略)歌を増補したのが、この冷泉家本『花山僧正集』

であった」と述べておられるが、もともとすべてが一系統と考えられる『遍昭集』のなかでも、『花山僧正集』が接触したのは西本願寺本よりは唐草裝飾本に近い本であったと言ひ換えることができるだろう。

以上のように本文を精査することによって、歌数ではなく本文から『遍昭集』の系統が定められることが明らかとなった。そしてその結果、唐草裝飾本が『花山僧正集』と近い関係にあること、また『花山僧正集』と歌仙家集本系統の本文とは隔たっているので、『花山僧正集』を写した定家本を歌仙家集本系統の祖とする藤本孝一氏の説は疑わしいことを述べた。『遍昭集』で基本とされてきた三四首に満たない唐草裝飾本と、基本部分の末尾に歌を増補し歌数が多くなっている『花山僧正集』とでは、歌数の違いのみに頼った場合には見のがされてしまう近似が、本文を確認することによって明白になったのである。これらの結果から、『遍昭集』は概ね次の図のように伝えられてきたと考えられる。



本文による『遍昭集』の
伝本分類試案

『遍昭集』は早くに二系統に分かれ、後にそれぞれが二類に分かれて現在の四類となったことが推測されるのである。

ただし、以上のような諸本間の関係は想定できるものの、これらの本文が伝わった経路をたどるのは簡単なことではなく、依然として問題が残っている。たとえば唐草裝飾本と『花山僧正集』のどちらの本文がよりよいかなどは分からないし、また唐草裝飾本・『花山僧正集』系の本文と、対立している西本願寺本・歌仙家集本系の本文とではどちらがより古体を残しているかを決する手掛かりもない。そのような中で『遍昭集』を読むにあたり、現段階では主要伝本のうち詞章をまったく脱していない西本願寺本の本文が一番よいと言わざるを得ない。しかし、それとは異なった本文を提供する唐草裝飾本や『花山僧正集』をないがしろにするわけにはいかない。平安後期における『遍昭集』の本文を考えるうえで、唐草裝飾本や『花山僧正集』の本文を確認することは不可欠であるといえる。

今後はそれぞれの系統における異同の特徴やその傾向、発生理由などについても詳しく検討していくことを課題としたい。

注

- 1 本文の引用は『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』（角川学芸出版 1100111）による。
- 2 遍昭の和歌史上における地位を述べた先行研究として、川村晃生「僧正 遍昭―その詠歌の特質をめぐって―」（慶應義塾大学藝文学会「芸文研究」）

- 41 (一九八〇・二二) がある。川村氏は「一般的に言って、遍照という歌人が当代歌人の中で或る特殊な位置を占めていたということ」が「広く認められるところであろう」と述べ、「遍照は古今前後という和歌史上の時代の担い手であり、まさにその時代の歌人であったと言える」とされた。
- 3 阿部俊子『僧正遍照集』(『歌物語とその周辺』へ風間書房一九六九)、片桐洋一『冷泉家時雨亭叢書第十四卷 平安私家集 一』(朝日新聞社一九九三) 解題、島田良二・千艘秋男『御所本三十六人集本文・校本・研究』(笠間書院 二〇〇〇) 解題。本文系統は島田・千艘両氏の著書を参考にした。
- 4 千艘秋男・島田良二編著『笠間索引叢刊126 流布本三十六人集 校本・研究・索引』(笠間書院 二〇〇七)
- 5 本文は正保版本による。
- 6 注3掲片桐洋一氏解題。
- 7 この花山僧正集の末尾に増補された二〇首について片桐洋一氏は、「遍照の歌でないものを中心をなしており、既に存在していた西本願寺本のような形の本の後に他人歌などを付加して、膨張・成長をはかったと考えるべきであろう」と述べておられる(注3掲片桐洋一氏解題)。
- 8 片桐洋一『唐草裝飾本三十六人集について』『冷泉家時雨亭叢書第二十卷 平安私家集 七』(朝日新聞社 一九九九)
- 9 本文は西本願寺本による。
- 10 『新編私家集大成 CD-ROM版』(エムワイ企画 二〇〇八)「遍照集解題」中の「新編補遺」(片桐洋一)
- 11 藤本孝一「藤原定家の書写と古筆切——『公忠朝臣集』『花山僧正集』を中心に——」(片桐洋一編『王朝文学の本質と変容 韻文編』研究叢書276 へ泉書院 二〇〇一)
- 12 注4に同じ。
- 13 本稿で使用する『遍照集』の依拠テキストは以下の通りである。
唐草裝飾本(『冷泉家時雨亭叢書第二十卷 平安私家集 七』朝日新聞社一九九九) 影印、西本願寺本(三十六人集刊行会制作『限定版西本願寺藏三十六人集』書芸文化新社 一九七二)複製、歌仙家集本(正保四年版本)(奈良女子大学付属図書館蔵(881A10-0006) 正保版本哥仙家集一〇卷) 赤人 遍照 順、『花山僧正集』(『冷泉家時雨亭叢書第十四卷 平安私家集 一』朝日新聞社 一九九三) 影印。
- 14 西下経一・滝沢貞夫編『古今集校本「新装ワイド版」』(笠間書院 二〇〇七)(巻第一 春上・二七)
- 15 川上新一郎・兼築信行「資料紹介 陽明文庫蔵『清輔袋双紙』——新出巻末部分翻刻——」『和歌文学研究』54 (一九八七・四)
- 16 金子元臣『古今集評釋』(明治書院 一九三二) p.978
- 17 小島憲之・新井榮蔵校注『新日本古典文学大系5 古今和歌集』(岩波書店 一九八九)、小沢正夫・松田成穂校注・訳『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』(小学館 一九九四)
- 18 注14掲書による(巻一九 雑体・一〇一六)。
- 19 『古語大観』(築島裕ほか編 東京大学出版会 二〇一一)によると「ありく」は「有り行(い)く」の転かと考えられ、一方「有り行(ゆ)く」が「あるく」に転じた可能性があるという。つまりこれら二語は意味的にはほとんど違いを持たないようである。上代においては「あるく」の方が一般的であったと思われるが、平安時代以後、特に和文において「ありく」が広く用いられるようになる。しかしその後、中世末期には「ありく」は衰減し、「あるく」に圧倒されるようになった。
- 20 注14掲書による。
- 21 『新撰髓脳』本文は以下の通り。

- また二句にすへに同字あるは、世の人みな去るものなり。句の末にあらねどもことばの末に有るは、耳にと、まりてなん聞ゆ。
- 散りぬれば後は芥となる花をおもひしらずもまどふてふかな
句をへだたらで、去らざらむよりは、おとりて聞ゆるものなり。
- 久松潜一・西尾實校注『日本古典文学大系65 歌論集 能楽論集』(岩波書店 一九六一) 解釈は本書の頭注を参考にした。
- 準備中の別稿において、諸本の本文異同を一覧にして示す予定である。
- 23 西本願寺本・唐草裝飾本と正保版本・『花山僧正集』とが対立している本文、および正保版本・唐草裝飾本と西本願寺本・『花山僧正集』とが対立している本文を数えると、それぞれ六箇所が見られた。
- 24 注3 掲阿部俊子氏著書 p.128
橋本不美男「御所本三十六人集解説」『宮内庁書陵部蔵 御所本 三十六人集』(新典社 一九七一)
- 25 和歌史研究会編『私家集大成』(明治書院 一九七三) 解題「遍昭」(小林茂美)
- 26 阿部俊子「私家集全釈叢書15 遍昭集全釈」(風間書房 一九九四) p.73
小松茂美『古筆学大成』第十七卷(講談社 一九九二) pp.404-405
注3 掲片桐洋一氏解題。「羽林郎藤」が冷泉為満であるということは「御所本 三十六人集」の「公忠集」奥書に「羽林良将藤為満」とあることによる。(小松茂美『古筆学大成』第十七卷(講談社 一九九二) p.404)
- 27 徳川義宣「御所本 三十六人集 甲本 僧正遍昭集の奥書について」(『金鯢叢書・史学美術史論文集』第一〇輯(徳川黎明会 一九八三))
家康の手習は現在四葉が確認されており、それぞれ徳川美術館、名古屋東照宮、徳川義宣氏、個人の所蔵である。なお当時、『花山僧正集』は未発見。
- 31 徳川義宣「御所本 三十六人集 甲本 僧正遍昭集の奥書について 補

- 訂」(『金鯢叢書・史学美術史論文集』第二一輯(徳川黎明会 一九八四))
片桐洋一「冷泉家時雨亭文庫の勅撰集と私家集」(藤本孝一監修『冷泉家時雨亭叢書完結記念 朝日新聞創刊二三〇周年記念 冷泉家王朝の和歌守展』(朝日新聞出版 二〇〇九))
- 32 注11 掲論文。
33 注3 掲片桐洋一氏解題。
34 右に同じ。
35 家人博徳「中世書写論―俊成・定家の書写と社会―」(勉誠出版 二〇一〇) p.146
36 注3 掲片桐洋一氏解題。

〔付記〕

本論は広島大学国語国文学会平成二十四年度研究集会における口頭発表を再検討し成稿としたものである。発表の席上で、また発表後に貴重な意見をいただいた方々に感謝申し上げます。

― かたぎり・まい、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学 ―